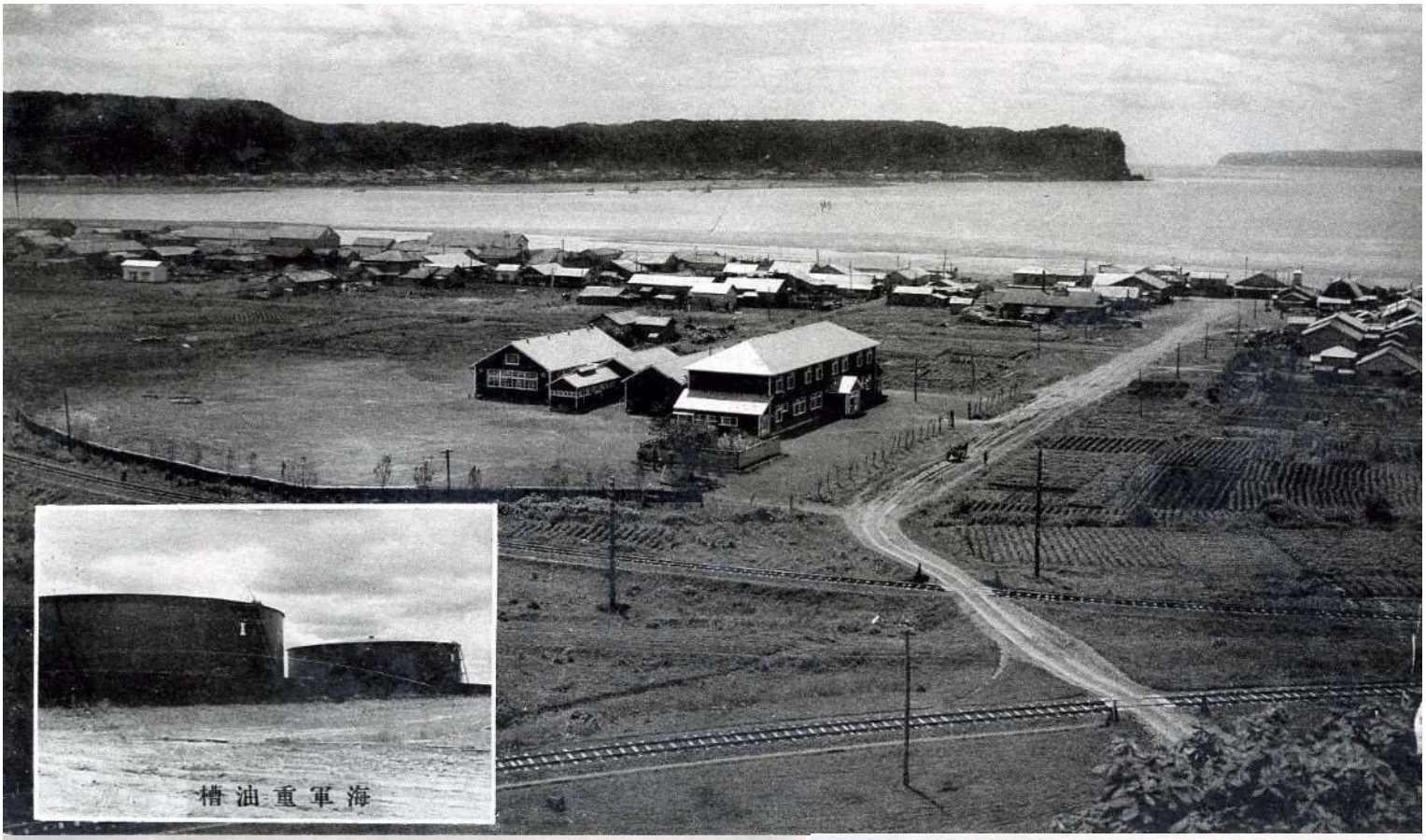
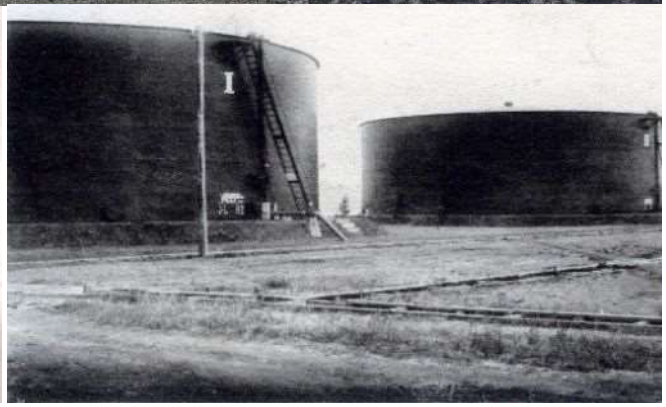






令和７年度厚岸町海事記念館特別展

終戦から８０年

－戦時下の厚岸－

冊子版

2025
7/26（土）―― 8/24（日）

※ 終了しました

入館無料

［時　　間］9:00 ～ 17:00（月曜・祝日の翌日は休館日）

［場　　所］厚岸町海事記念館（厚岸町真栄３丁目４番地）



厚岸海事記念館オリジナルキャラクター
かいじくん

［問合せ先］TEL　0153-52-4040　Mail k-kaiji@akkeshi-town.jp

・はじめに

今年は、アジア・太平洋戦争が終結してからちょうど 80 年となります。

本展示は、終戦 80 年を迎え、戦時下の厚岸町がどのような状況に置かれていたのか、パネルや当館に寄贈された資料などをもとに読み解いていきました。

対象とする時期は、主に満州事変が勃発した 1931 年（昭和 6 年）からアジア・太平洋戦争が終結した 1945 年（昭和 20 年）の通称「15 年戦争」と呼ばれる時代としますが、各トピックによっては、それ以前の時期や戦後の状況なども記載しています。

また厚岸町には、現在でも戦争遺構が町内にいくつも確認されており、展示ではそのいくつかを写真等で紹介しました。

（担当：厚岸町海事記念館 学芸員　小田島賢）

・15 年戦争の概要

「15 年戦争」とは、1931 年の満州事変から 1945 年の 15 年間にわたって日本が行った戦争を指します。

1931 年（昭和６年）９月、武力による満州の制圧を企てた日本の関東軍は、奉天近郊の南満州鉄道の線路を自ら爆破し（柳条湖事件）、中国軍への攻撃を開始しました。その後、日本軍は満州全土を占領し、翌年には満州国を建国しました。これを満州事変といい、中国政府はこの件について国際連盟に訴えたことで調査が行われました。結果として日本は国際社会から批判されることとなり、国際連盟を脱退します。

こうして日本は、国際協調路線から大きく方向転換し、孤立への道を歩むこととなりました。

1936 年（昭和 11 年）には、国内で皇道派と統制派の派閥的対立があり、皇道派の陸軍青年将校が千人あまりの兵隊を率いて、当時の大蔵大臣であった高橋是清らを殺害する事件が起きます（二・二六事件）。

こうして陸軍当局は、内部の統制を確立し、軍部大臣現役武官制を復活させるなど、政治の主導権を握っていきました。

1930 年代後半にはいって国際的孤立を深めていた日本は、ヒトラーの率いるドイツや、ムッソリーニの指導するイタリアに接近し、日独伊三国防共協定を結びました。

このような状況のなか、1937 年（昭和 12 年）には北京郊外で日本軍と中国軍の武力衝突がおこり（盧溝橋事件）、戦火は中国中部まで広がりました。日本が次々に大軍を送って戦線を拡大したのに対し、中国側は国民党と共産党が協力して抗日民族統一戦線を結成し、日本に抵抗しました。こうしてはっきりした宣戦布告がないまま、本格的な「日中戦争」へと発展していきます。

日中戦争が長期化すると、日本は国家の全ての力を戦争に集中できる体制を整えるため、1938 年（昭和 13 年）には国家総動員法を制定します。

このような流れのなか、日米関係は悪化の一途をたどり、ついに日本海軍は 1941 年（昭

和 16 年）12 月８日に、アメリカのハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、陸軍はイギリス領のマレー半島に上陸するなど太平洋各地で軍事行動をおこし、アメリカ・イギリスに宣戦布告したことで太平洋戦争が勃発します。

日本軍は開戦後半年ほどで、東南アジアのほとんど全域を占領したことで、政府や軍部に対する国民の支持が高まりますが、1942 年（昭和 17 年）のミッドウェー海戦での敗北をきっかけに、急速に日本軍は不利な状況に陥ります。翌年にはアメリカ軍を中心とした連合国軍による本格的な反抗がはじまり、ガダルカナル島での戦いなど多くの戦闘で敗北を重ねます。

こうして、1945 年（昭和 20 年）３月には、夜間大空襲による焼夷弾攻撃により、東京の下町が焼き尽くされます（東京大空襲）。さらに、日本全国の主要都市が空襲を受け、同月にはアメリカ軍が沖縄に上陸し、住民をまきこんだ激しい戦闘が繰り広げられ、６月に日本軍が全滅し、沖縄はアメリカ軍により占領されることとなりました。

７月にアメリカ・イギリス・ソビエト連邦の３国はポツダムで会談し、「ポツダム宣言」を発し、日本に降伏を呼びかけます。しかし、日本はこれを黙殺したため、アメリカは８月６日に広島、９日には長崎に原子爆弾を投下します。そのうえ８月８日にソビエト連邦が対日宣戦を布告し、満州・千島に侵入を開始します。

日本政府はついに意を決し、ポツダム宣言を受諾し、翌日に天皇自身のラジオ放送（玉音放送）を通じて、国民に敗戦の意を明らかとします。そして９月２日には、アメリカ戦艦ミズーリ号上で、日本は連合国との間で降伏文書に調印し、長きにわたる戦争は終結します。

以上がいわゆる「15 年戦争」のてん末ですが、この戦時下における厚岸町での状況はどのようなものだったのでしょうか。



図１　真龍より本町を望む（昭和 10 年代撮影と思われる）

・厚岸の軍港化

古くから、「天然の良港」と呼ばれていた厚岸は、明治時代以降から軍事拠点としても注目されるようになりました。明治時代には厚岸町の郡総代や有志らは、太田地区に屯田兵が配置されたことをきっかけに厚岸を軍港にするべく、請願を試みましたが進展はありませんでした。

大正時代にも、厚岸町は「厚岸港ヲ軍港ト為スノ調査ニ関スル意見書」を北海道庁に提出し、海軍省に調査を依頼するよう請願しましたが、これも実現しませんでした。しかし、これ以降厚岸港を訪れる海軍機や艦船は増加し、1925 年（大正 15 年）に海軍機２機が試験飛行で訪れたほか、1927 年（昭和２年）には海軍機２機・飛行艇２隻が飛来しています。

また、海軍による重油タンク２基とポンプ場も 1928 年（昭和３年）に現在の港町地区に完成し、これ以降町内には海軍の施設が着々とつくられはじめ、「最北の海軍基地」として位置付けられるようになります。



図２　港町地区にあった海軍重油タンク

・軍用機の献納運動

満州事変（1931 年（昭和６年））以後、軍事機運が盛んになると、全国各地で軍用機を献納する運動が行われるようになりました。それは厚岸でも例外ではなく、軍用機を購入するための募金は、日中戦争や太平洋戦争を通じて行われました。



図３　第一厚岸號

1944 年（昭和 19 年）には、町内で軍用飛行機「厚岸号」を献納しようという動きがみられはじ

めます。１月６日に、町役場に宗教団体や各町内会、町議をはじめとする各代表者が集まり、飛行機の献納を完遂するべく、「航空機厚岸号資金造成委員会」を結成しました。

委員会では、１月中に 15 万円以上を集めることを目標に掲げ、「一機でも多く前線へ」を合言葉にしました。檄文が町内に張り出されるなど、全町的な飛行機献納運動が展開されました。その結果、目標を大幅に超えた金額が集まり、年内には２機の献納が果たされたことが、北海道新聞の記事にも残されています。

・在郷軍人

大日本帝国による国家総動員体制を地域で支えていたのは、「在郷軍人」でした。在郷軍人とは、現役を終え、予備役、後備役、第一国民兵役などの兵役に就いている者のことを指します。在郷軍人は、いつ召集・動員されてもいいように、軍隊手帳や記章などを入れた奉公袋を常に準備していました。

陸海軍省管轄の公的組織であった帝国在郷軍人会の地方分会として、厚岸町では 1910 年（明治 43 年）に「厚岸在郷軍人分会」が設立されています。この分会では、町内の軍人家族の援護や支援、防備体制の強化のほか分会員の軍事教育などに尽力し、３月 10 日の陸軍記念日には、厚岸に駐屯している陸軍部隊と合同演習を行ったほか、防空訓練の際には青年学校の生徒と戦闘訓練を実施するなど、町内での戦時体制下を支えていました。

・戦時下の学校教育

学校教育の面においても、戦時色は濃厚かつ急速に進められました。1941 年（昭和 16 年）の「国民学校令」の実施と 1943 年（昭和 18 年）の「教育ニ関スル戦時非常措置方策」などの通達によって、戦争遂行のための教育が全国的に行われていきました。

特に高学年には、勤労の強化や、精神訓練の徹底、国防訓練の強化・生産教育・職業教育などを実施し、青年学校の制度も強化されました。

戦時下の厚岸町においては、厚岸国民学校、真龍国民学校、太田国民学校、末広国民学校、苫多国民学校、尾幌国民学校、床潭国民学校、小島国民学校、菊地国民学校、上尾幌国民学校、高知国民学校の 11 校が設置されていました。

「国民学校」は終戦後、新しい学校教育法により、1947 年（昭和 22 年）３月 31 日に改称され、現在の名称となりました。

・皆既日食

近代以降、厚岸町が学術的に全国から注目を浴びた出来事が２回ありました。それは皆既日食観測の場としてです。１回目は 1896 年（明治 29 年）８月９日、２回目は 1943 年（昭和 18 年）２月５日でした。

１回目は、国内のみならず外国からの観測隊が厚岸で観測を試みましたが、濃霧のため失敗に終わっています。

２回目は戦時中のため外国からの観測隊は参加せず国内のみとなり、東京天文台の関口鯉吉台長らが真龍の高台に観測基地を設けました。

当日は快晴となり、日食は６時 45 分から欠けはじめ、皆既は７時 53 分から約 100 秒続き、ダイヤモンドリングもはっきりと観測されています。この日食は日本を離れた後、対戦国であるアメリカへと移動していきました。

なお、2025 年現在、次に日本で皆既日食が見られるのは、終戦 90 年を迎える 2035 年９月の予定となっています。

・町内での防空訓練

厚岸町内では、空襲等に備えるため、1940 年（昭和 15 年）５月に役場内に厚岸町防空本部を設置しました。

本部の指揮のもと、設置以降は毎年２回以上防空にかかる演習が行われるようになりました。

演習は２日の行程で、昼夜を通して行われたようです。内容は防空本部と警察の協議により、警戒警報、空襲警報の発令、灯火管制、防空資材の確認、消火訓練などが行われました。演習の際の服装は、女子が防空頭巾・モンペ、男子は戦闘帽・防空頭巾・国民服・巻脚絆となっていました。

1943 年（昭和 18 年）12 月の演習では、敵軍が厚岸町に上陸したという設定で、戦闘訓練が実施されました。この訓練では在郷軍人分会聯合が敵軍として上陸し、青年学校生徒がこれを迎撃するという市街戦が繰り広げられたとのことです。

なお、敵軍が上陸した場合には、太田街道から標茶、阿寒方面に退避することになっていたようです。

・戦死・戦病者

戦死戦病者の数は、『厚岸町史』（1975 年）によると、1932 年（昭和７年）からの記録が残されています。太平洋戦争が始まった翌年の 1942 年（昭和 17 年）からその数が増え、終戦の 1945 年（昭和 20 年）には 151 人が亡くなっています。1947 年（昭和 22 年）までには、331 人の尊い命が犠牲になっています。

ちなみに太平洋戦争が始まった昭和 16 年に厚岸町の人口は 17,000 人を超えていましたが、戦局が激化してくると次第に減少し、1945 年（昭和 20 年）には 12,600 人余りになりました。

国内からの引き揚げ者は、1947 年（昭和 22 年）までに全部で 100 世帯、268 人に達しました。また、終戦から 1949 年（昭和 24 年）にかけては、千島・樺太（サハリン）・朝鮮半島を含む外国からの引き揚げ者は 322 世帯、1,304 人となっています。

表１ 戦死・戦病者の人数（厚岸町 1975 より作成）

年次	陸軍（人）	海軍（人）	軍需（人）	合計（人）
1932年	1			1
1938年	4			4
1939年	9			9
1940年	11			11
1941年	5	1		6
1942年	15	4	1	20
1943年	23	5	2	30
1944年	40	25	11	76
1945年	109	31	11	151
1946年	6	1	2	9
1947年	5		1	6
年次不明	7		1	8
合計	235	67	29	331

・戦時下の水産業①（捕鯨）

厚岸町では、1931 年（昭和６年）に捕鯨による経済の活性化が期待され、設置期成会が結成されます。その翌年にはノテト（真龍）に事業所が設置され、操業が開始されました。

この事業所の成績は概ね良好で、1942 年（昭和 17 年）には毎日 10 トンほどの水揚げがありました。また、翌年に水産統制令を受け、西太平洋漁業統制株式会社となりました。

戦時下においては、船員が 21 ミリ機関銃を所持して操業を続けましたが、捕鯨船は艦載機の艦砲攻撃により撃破されるなど、大打撃を受けました。

1945 年（昭和 20 年）の終戦前には、第一大東丸・丸三丸の２隻の捕鯨船が残っており、紋別に回航することで、７月の空襲の被害を受けず難を逃れています。この２隻は、終戦後の８月 31 日の航海停止令まで操業を続け、計 42 頭（約 2,100 トン）が水揚げされています。

・戦時下の水産業②（ニシン漁）

明治末期から大量に漁獲されたニシンは、魚油や魚粕に利用・加工され、厚岸の経済を潤しました。大正時代からは徐々にニシンの回遊が少なくなりました。昭和に入ってからも依然として低迷を続けていましたが、ニシンなどの魚油は需要があり、主にイギリスやオランダ・ドイツなどに少量ながらも輸出を行っていました。

戦時中の 1943 年（昭和 18 年）から 1944 年（昭和 19 年）にかけては、突如としてニシンが大漁となり、厚岸湖内で大型のニシンが 50 万貫ほど獲れたようです。この豊漁は、白糠にも伝わり、報を聞きつけた兵隊が買い付けに来たり、またニシンの山に群がるカラスを追うために人を雇ったという話もあったようです。

しかし、こうした豊漁は２年間のみであり、戦時下におけるニシン漁は総じて不漁でした。

・戦時下の水産業③（コンブ漁）

明治時代から大正時代を経て、昭和に入ってからもコンブ漁は厚岸での漁業の中心でした。ネコアシコンブを加工してヨードが精製され、火薬の原料として利用されたほか、ナガコンブは中国へと食用として大量に輸出されていました。

しかし、1931 年（昭和６年）には、対中関係が悪化したことにより、コンブの輸入が封鎖されました。1937 年（昭和 12 年）の日中戦争の開戦によって、厚岸のコンブは輸出主体から国内向けの出荷・消費へと置きかわるようになりました。

また、燃料が配給制となった後は、重油を節約するために１か月休漁とする対策も取られたようです。

このように、戦時下における厚岸の漁業は、戦争とそれに伴う対外貿易路の消失によって経済的な打撃を受け、漁業を営むための社会基盤までもが失われた時期となりました。

・戦時下の馬産

1937 年（昭和 12 年）からの戦時体制下では馬の需要が増加し、馬の平均販売価格は大きく上昇しました。1942 年（昭和 17 年）には、中国での戦地で使うことのできるような軍馬の増強を目的として、効率的に馬資源を図るために種馬統制法が制定されました。

これに先立って 1941 年（昭和 16 年）２月には、優秀な軍馬を生産するため、別寒辺牛村に厚岸国営牧野が開設されていました。この牧野では、種牡馬・種牝馬・２歳馬・１歳馬を 60～360 日ほど受託し、放牧を行い、管理育成することが目的でした。

戦争が激化してゆくと厚岸地域で飼育していた馬が軍馬や荷駄馬として購入されていきました。この時期、道東は一大馬産地として馬産のピークを迎えていましたが、軍頼みの経営であったため、戦争の終結とともに、需要がなくなり、戦後に大きな転換を強いられることになりました。

・日連丸事件

輸送船「日連丸」は、1944 年（昭和 19 年）３月 16 日午後４時に、ほかの輸送船３隻とともに千島を守備する将兵約 2,800 人を乗せ釧路港を出航しました。午後８時過ぎ、厚岸町の大黒島沖を航行していたところ、米国の潜水艦タウトグ号の魚雷２発を受け沈没しました。さらに護衛駆逐艦「白雲」も潜水艦と戦いましたが、午後 11 時すぎに撃沈され、乗員 270 名が亡くなっています。

将兵のほとんどは亡くなりましたが、かろうじて生存した 45 名は救助され、３月 18 日に正行寺に収容されました。犠牲者の大半は宮城・新潟・福島・山形県の出身者でした。

この一連の事件は、当時の国内情勢として戦局がひっ迫していたことから、兵員の損失を国民に隠すため、軍内部でも極秘扱いとされ、戦後も長い間一般に知られることはありませんでした。

戦没者の遺族は、戦死の真相を調査しておりましたが、1982 年（昭和 57 年）になってよ

うやくこの事実が判明しました。1984 年（昭和 59 年）８月４日、事件から 40 年ぶりに遺族や戦友が厚岸町を訪れ、地元の有志ら 120 名によって、正行寺で法要が行われました。

1987 年（昭和 62 年）には、地元の有志によって正行寺境内に慰霊碑が建てられ、翌年には愛冠に遭難平和の碑が建てられました。

1993 年（平成５年）には、厚岸沖で遺族 148 名、生存者５名、戦友５名が参加し、海上慰霊祭が行われました。その後、数年に一度慰霊祭が行われ、2024 年（令和６年）の慰霊祭では東北や首都圏などから遺族 15 名が訪れ、戦死者の冥福を祈りました。



図４　愛冠岬にある日連丸の石碑



図５　正行寺にある日連丸戦死者追悼の石碑

・町を襲った空襲

1945 年（昭和 20 年）７月 14 日、厚岸神社の祭典が行われる夜宮の日、米軍の艦載機による空襲が厚岸町を襲いました。時刻は午前５時 30 分の朝早く、飛来したのは５～８機といわれています。

このような空襲は明くる日も続き、２回の空襲によって、現在の港町にあった海軍重油タンク１基が 15 キロ爆弾により破壊され、渡船場付近や松葉通りが銃撃を受けました。これにより渡船の待合室は消失し、２名が死亡しました。

このほか、アブラコ釣りをしていた漁夫４名が機銃掃射を受け、２名が即死、１名が負傷しています。この空襲では計６名が死亡、８名が負傷しています。

市街地以外の西部では、尾幌国民学校が爆撃により全壊、上尾幌でも銃撃を受けています。町内東部では糸魚沢で列車が襲撃を受けましたが、幸い被害はありませんでした。

米軍機に対して、大黒島の高角砲陣地などから数発応射しましたが、無防備に等しかったようです。

７月 14 日・15 日の２日間は北海道内の 78 市町村（当時）で空襲を受け、死者は 1,925 名、負傷者は 970 名、被害戸数は 6,680 戸、被災者は 33,400 名を数え、甚大な被害となりました。

表２　厚岸空襲による死亡者一覧（山本竜也 2011）

No.	日付	名前	年齢	身分・職業など	空襲を受けたときの様子・死因	出典
1	7月14日	三浦五郎八	不明	漁民	アブラコ釣りをしていたところ機銃掃射を受けた。	厚岸町史上巻(1975年)など
2	7月14日	池田徳太郎	不明	漁民	アブラコ釣りをしていたところ機銃掃射を受けた。	厚岸町史上巻(1975年)など
3	7月14日	越野吉隆	14	高等科2年	午前5時半ころ、裏庭から自宅に入るところで機銃掃射に遭い、腰の後ろから下腹部に機銃弾が抜けた。その後、町立病院で昼頃死去。	厚岸町史上巻(1975年)など
4	7月14日	不明	不明	行商人	行商人某が即死。	厚岸町史上巻(1975年)など
5	7月14日	船場定雄	22	海軍	厚岸町大字真竜町で死亡。	三石町史(1971年)
6	7月14日	不明	不明	陸軍	上尾幌駅構内の信号機近くに落とされた爆弾により死亡。	広報あっけし第578号(1995年)

・厚岸防備隊

戦争が激化し、厚岸湾周辺におけるアメリカ軍潜水艦の活動が活発化するなか、1944 年（昭和 19 年）６月 10 日に大湊警備府指揮下に厚岸防備隊が新たに編制されました。厚岸防備隊の隊名は、すでに「大湊防備隊戦時日誌」の５・６月分に「厚岸防備部隊」として記載されており、この防備部隊は大湊防備隊厚岸派遣隊をもとに編制されました。防備部隊は筑紫恋に本部を置き、愛冠や床潭、大黒島の海面砲台などを管轄しました。

厚岸防備隊は陸上部隊と海上部隊から構成され、陸上部隊の編制人員は准士官以上が 19 名、下士・兵員が 330 名（1944 年６月時点）、海上部隊は大湊警備府第二十七掃海隊所属の第一玉園丸、第二玉園丸、吉野丸、園部丸によって編制され、その他にも３船が指揮下に入り、敵潜水艦の発見や撃滅などの任務を遂行しました。

・第 903 海軍航空隊厚岸基地派遣隊

1944 年（昭和 19 年）以降、戦争が激化し、大日本帝国による絶対国防圏が突破され、連合軍との交戦により減じた航空兵力を再編するために、日本各地で対潜哨戒にあたっていた航空隊が、東日本の第 903 海軍航空隊と西日本の第 951 海軍航空隊に集約されることとなります。大湊警備府に所属していた大湊海軍航空隊は、東日本に所在していることから第 903 海軍航空隊の管轄になり、解隊され「第 903 海軍航空隊大湊派遣隊」となりました。厚岸の派遣隊もこれに含まれており、奔渡付近にあった航空基地を拠点に常駐することになりました。この厚岸の派遣隊は、厚岸湾及びその周辺の海域の対潜哨戒、海上護衛任務にあたりました。

厚岸に常駐することとなった具体的な時期は定かではありませんが、厚岸防備隊の日誌に残されている図を参照すると、1944 年６月の図には無い「航空基地」が 1945 年６月の図に追記されていることから、この間の期間であることが推測されます。

・大黒島特攻基地設置計画

1945 年（昭和 20 年）１月、本土防衛のための「決号作戦」が策定されました。これにより「水上及水中特攻基地」について、具体的な場所を提示し、北海道では厚岸付近が指定さ

れました。

この戦争における日本軍の水上特攻では「マルレ」や「震洋」といった舟が採用されており、このうち厚岸での配備は「震洋」が予定されていました。「震洋」は「太平洋を震撼させる」という意味をもつ１人乗りの小型高速艇で、全長 5.1m、重さ 1.4 トン、速力 23 ノットの舟でした。

この舟を格納するため、大黒島の北側岸壁に横穴を掘る工事が進められましたが、完成前に終戦を迎えています。横穴は現在も大黒島に残され、そのすがたを観察することができます。

そのほか、特攻基地の設置にあたって準備が進められており、第 903 海軍航空隊厚岸基地派遣隊による「特攻訓練」も終戦間際の７月に実施されていたようです。



図６　大黒島に設置された震洋格納庫予定地跡



図７　大黒島灯台付近に設置された防備衛所跡

・終戦ーまとめにかえてー

1945 年（昭和 20 年）８月 14 日にポツダム宣言を受諾し、翌日、天皇が終戦の詔を発してアジア・太平洋戦争は終結しました。

しかし、その後も北海道周辺のサハリン・千島列島では、日本軍とソビエト連邦軍との戦闘が続きました。サハリンでは８月 22 日、千島列島では 23 日にそれぞれ局地停戦協定が結ばれ、日本軍の戦闘は完全に停止しました。

戦争の終結から 80 年が経ったいま、戦争経験者は数少なくなっています。また、厚岸町では、終戦後から多くの土地開発があり、戦争の痕跡は年々失われていますが、少なからず現在でも残されているものもあります。我々はこの出来事を決して忘れず、次の時代に語り継ぐ使命があります。

そして自治体博物館は、人々の記憶や文献の記録・資料からまちの歴史を紡ぎ・伝える存在として設置されています。本冊子を通して、みなさまに少しでも「戦争」について考える一助となれば幸いです。